

第十五章 独裁者V S 女王

特急イリ・ライナーはウクライナー共和国の首都キープを目指す。その速度は時速五百キロ以上で世界最速を記録する。わずかの間しか滞在しなかった新疆ウイルス自治領で改造されたらしい。ウイルス族の科学力の高さを示す。それなのになぜ中華明国の自治領なのかイリは不思議に思う。

「何とかプチレンコンを説得しないと大変なことになる」

加藤がイリではなく榊に言葉を向ける。心配するなと榊が応じる。

「イリの圧勝に終わるから気にしなくていい」

「そこが問題なんだ。プチレンコンがプチ切れて核兵器を使用したらどうなると思う？」

「そのときは宇宙戦艦か宇宙戦闘機ハヤブサで何とかするさ」

「それは最後の最後の手段だ。失敗すれば放射能汚染が広がる」

「一筋縄ではいかないと言うことか」

榊は宇宙戦艦でソシアの首都を制圧すればプチレンコンが白旗を揚げると思っていたが、核兵器のことまで考えていなかった。それに宇宙戦艦で介入すれば禍根を残すとも考えていなかった。

その点、加藤は巨大組織関東電力の福島原子力発電所長だったとき、トップの判断の理不尽さと政府の対応のまずさをいやというほど経験した。選択肢は多い方がいいが、その分選択を誤る可能性が高くなることも身をもって体験した。

*

独裁者は自分を尊敬することを取り巻きや部下や国民に強要する。しかし、そのような体制下で頂点に立つと一つ下のレベルはよく見えるが下に行けば行くほど霧がかかったように見えなくなる。ましてや底辺の隅っこなど見えるはずもない。しかし、この隅っこはピラミッドで言う基底だから見過ごすと崩壊の原因となる。

独裁者と言っても寿命に限りがある。頂点で座り続けると言うことは尖った槍の先に腰掛けるようなもので快適な場所ではないはずなのに固執するのはなぜなのか。

頂点の少し下の平らなところで過ごしたいが頂点を目指す者がいる限り絶えず警戒心を持って見下ろしていなければ安心できない。言い換えれば悪夢がよぎり眠れない。結局独裁者は心配症という重い慢性疾患を持つ。医者から手術と言われたらその医者に殺されるかも知れないと言う恐怖のどん底に落ちいる可哀想な病人が独裁者だ。最後は自殺するか自暴自棄になるかの選択肢しか残されない。後者の道を選ばれると非常に迷惑な結果が訪れる。

*

不思議なことにイリはノロから「独裁者」と烙印を押されながらも何とかしようとして地球に戻

つたがなかなかいい解決策を模索できない。持ち前の正義感だけでは対処できない。

「退化……退化……」

ノロが言っていた言葉を思い出す。

「退化する前に滅びるかもしれないわ」

ブラックスシーを支配するロシア艦隊がウクライナ共和国の港湾都市オデッセイからの穀物海上輸送路を遮断している。輸出できないからウクライナから食糧を輸入していた国々が悲鳴を上げる。

「せめて食糧だけは何としなければ」

イリは専用回線を使ってウクライナのダレデモスキー大統領に連絡を取る。大統領の話ではロシア海軍がオデッセイのすぐ沖合にある島を占領しているのでどうにもならないという。イリはこうなればハヤブサで島を攻撃するしかないと決断するが加藤が反対する。

「島を開放するのは簡単だが輸送船を守ることはできない。できないこともないが立ち回りが派手になる」

要はイリではなく地球に戻った宇宙戦艦が表舞台に登場することになる。

「そうなる和我々が地球に関与することになる。果たしてノロが賛成するだろうか」

ここでイリは重大なことに気付く。

「私を独裁者と言ったノロこそが独裁者じゃないの！ 何が閣將軍なの！」

ノロがイリを独裁者と呼び自分はその下の閥將軍と位置づけてたいそう満足げに笑っていたことを思い出す。

「やっぱり私は飾りなのだわ。亭主関白、いえ弟関白だわ」

この独り言のようなセリフを聞いた榊と加藤は苦笑いする。

「確かにそんな感じだなあ」

加藤が何気なく車内のモニターを見つめると大声を上げる。

「何だ！ 特急ウク・ライナーの最後尾に赤いもの連結されているぞ！」

全員の視線がモニターに集中する。

「象の頭のようにも見える……」

イリの言葉に反応してモニターの映像に解説が現れる。ウイルス族からのメッセージだとイリたちは確信する。

「レッド・エレファント……奇妙な戦車ね。これを使えば……」

加藤がイリを遮るように感心する。

「これがイリ・ライナーを押していたから時速五百キロも出せたのか」

イリは加藤を無視してボキボキと指を折ってから拳を造って腕を上げる。

「行き先変更！ オデッセイへ！ 私、独裁者になりきるわ！ 攻撃あるのみ！」